

【翻 訳】

フレデリック・ダグラス著

## 『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第五章～第六章\*

堀 智 弘

### 第五章 奴隷制の謎に次第に開眼する

主人をだんだんと知るようになる。主人の性格。抑制なき激情がもたらす諸悪。見たところの優しさ。苦悩する主人。そのぶつぶつ言う癖。主人の言葉に注意する必要。子供の奴隷が愚鈍だと思われていること。情け容赦なき暴力。飲んだくれの監督。奴隷所有者の性急さ。目上の者に訴えることの賢明さ。奴隷所有者の怒りは監督のそれと同じく厄介。愛情をなきものにする非道で身勝手な企て。心をかき乱す光景

我が主人——アンソニー船長——は当初、（読者はすでにおわかりのように）わたしにほとんど関心を払わず、そのわずかな関心

(1) \* 本稿は JSPS 科研費 JP18K00204 による研究成果の一部である。

は非常に穏やかで優しい種類のものであったとはいえ、たった数ヶ月で、穏やかさと優しさは彼の主だったあるいは支配的な性質ではないということを確認させるのに十分であった。こうした素晴らしい性質はときおり表れるだけであった。彼は、攻撃者に対してなすすべのない者から懇願を受けても、その気になれば、人間性の主張に文字どおり無感覚な風体をとることもでき、彼自身の手で深く暗く公言をはばかるような非道行為を行うこともできた。しかし、彼は生まれつき他の人たちよりも悪人というわけではなかった。もしアンソニー船長が、自由州において、自由社会の正当な抑制——その成員すべての自由のために等しく平等に必要とされる抑制——に囲まれて育っていたならば、いま奴隷制に反対している多くの人たちと同じくらい人道的で、あらゆる点で同じくらい立派な人物になっていたかもしれない。社会の一般の成員と同じくらいには人道的で立派な人物になっていたに違いない。

い。奴隷所有者は奴隷と同様に、奴隷制度の犠牲者なのである。人物の性格はそのまわりの物事の色や形態から、その色あいと形をおおいに受け取るものである。全宇宙のなかで、奴隷所有者が奴隷に対して有している関係ほど、高潔な性格の発展に不向きなものはない。ここでは理性は閉じ込められ、激情がのさばり返っている。激情はいつたん火がつくと、大平原の野火のごとく、あらゆる風に吹かれるがまま、その容赦ない火の手にかかったあらゆる可燃物を焼き尽くすまで燃えなくてはならない。アンソニー船長は優しくなることもでき、時として愛情深い気質を示すことさえあった。もし読者が、彼がわたしと手をつないで歩き——実際ときおりそうしてくれたように——わたしの頭をポンポンと叩いて、穏やかでかわいがるような声音でわたしに話しかけ、わたしのことを我が「かわいいインディアンぼうや」<sup>1</sup>と呼びかける様子を見ることができたら、読者は主人を心優しい老人、そして本当に、ほとんど父親のようだと思うことであろう。だが、奴隷所有者の上機嫌はきわめてもろく、簡単に弾け飛んでしまう。それは頻繁には起こらず、長続きもしない。奴隷所有者の機嫌は常に試練を受けているが、そうした試練を忍耐強く耐え忍ぶことはまずないため、試練が彼の生まれつきの忍耐力を強化することもない。わたしはかなり早くから、主人はとても不幸な人であるという印象を受けていた。子供の目にさえ、彼は苦悩した表情、時として憔悴した表情を浮かべているように映った。彼の奇妙な所作は

1 ダグラスにアメリカ先住民族の血が流れていたかは不明だが、容貌からそう間違えられることは少なかつた(たとえば、*Life and Times of Frederick Douglass* (Yale UP, 2012), p. 362を参照)。

わたしの好奇心をかき立て、わたしの同情を買った。彼は一人で歩いている時には、たいいひとりごとをぶつぶつとつぶやいており、ときおり、見えない一団の敵に立ち向かうかのように、怒鳴りちらすことがあった。「やつにはこれこれこういうことをやらせる。もしやらなかったら、目にも見せてやる」というのが、彼が用いる脅しの決り文句であった。彼は空き時間のほとんどを、あたかも悪魔に取り憑かれた人物のように、歩き、罵り、身ぶり手ぶりをしながら過ごしていた。どう見ても、彼は自分自身の魂とも、まわりの全世界とも反目している不幸な人間であった。彼はひとりごとを子供たちに聞かれることを少しも気にしていなかった。彼は野原で出会うアヒルやガチョウと同じくらいにしか、わたしたちの存在を気にしていなかった。彼はまわりにいる黒い悪童たちが、彼の発声道を見通して、彼の心のまさに秘密を看取できようとはほとんど思ってもいかなかった。奴隷所有者たちは彼らが対処すべき知性をいつでも過小評価している。わたしは実際、この老人のひとりごと、態度、身ぶりを、彼が自分自身を理解しているのと同じくらいよく理解していた。奴隷所有者が奴隷と意思疎通をしていれば奴隷の知識の深さを測ることができないかもしれないが、しかし、そのような意思疎通はまず奨励されない。無知は奴隷という動産においては高い美德であり、主人が奴隷を無知のままにするよう努めているので、奴隷は狡猾にもそれが成功していると主人に思わせるのである。奴隷は「知らないのが幸福なら、知ることは愚か」という諺をよく理解している。<sup>2</sup>

2 トマス・グレイ(一七二六—一七七一年)の「イートン校の遠き眺めに寄せる頌歌」の九十九〜百行より。

(3)

わたしは、主人の身ぶりが激しく、脅すように頭を振って、中指と親指を鋭く鳴らすことで終わる場合には、彼からそれなりの距離を取るのが賢明だと考えていた。というのも、そのような時には、ささいな間違いも彼の目には重大な罪となり、彼は罰を与え、力とやる気を兼ね備えていたので、犠牲者は主人の近くにいさえずれば、それに値するしないに関係なく、罰を受けたからである。

奴隷制の非道さと邪悪さ、そして我が主人の無慈悲さにわたしの目を開かせた最初の出来事のひとつとして、タツカホーで彼が雇っていた監督が、ある若い女性をこの上なくひどく虐待し殴打したのに、主人がその権限を行使して彼女を守りかばおうとしなかったことがあった。この監督——プラマー氏なる人物——は彼の同類のほとんどと同じく、人間の姿をまとった獣とさして変わらない人物であり、その全般的なふしだらさと胸糞悪くなるほどの粗野さに加えて、みじめな飲んだくれであった<sup>3</sup>。おそらく我が主人が彼を雇ったのは、彼の仕事が優れていたからというよりも、安く雇うことができたからであろう。彼はラバの群れを管理するのに向いていなかった。彼が酔っ払って怒りのままに暴行を働いたことで、問題の若い女性は我が主人に保護を求めたのだ。この若い女性は、わたしのおばであるミリーの娘だった<sup>4</sup>。

3 おそらくジェイムズ・プラマーかファイリーモン・プラマーのどちらかである。どちらも長年トールボット郡の住人で、タツカホーにあるアーロン・アンソニーの農場で監督として働いていたことがあった。

4 ダグラスのいとこのヘニー・ベイリー（一八一六年〜？）は、アーロン・アンソニーの農場で働いていた奴隷ミリー・ベイリーの七人の子供のひとつ。一八二六年のアンソニーの見積りではヘニーは年少のフレデリックの半分以下の五十ドルの価値とされており、これはおそらく身体に障害があったためだと考えられる。

この哀れな女性は、わたしたちの家に到着した時には、同情をそらずにはおかないありさまであった。彼女は大意で、準備もなしに、そしておそらくプラマー氏に知られることなく飛び出してきたのだ。彼女は二十マイルを裸足で、首も頭もあらわに歩いてきた。彼女の首と肩はできたばかりの傷で覆われていた。しかもこの卑劣な人でなしは牛革の鞭で彼女の首と肩を傷つけるだけでは満足できず、ヒッコリー材の棍棒で彼女の頭を殴りつけ、ぞっとするほどの裂傷を負わせたため、彼女の顔は文字どおり血で覆われていた。哀れな若い女性はこのような状態で、我が主人の保護を懇願しにやってきました。わたしは、彼がこれのおぞましい行いへの怒りで煮えたんばかりになって、残忍なプラマーに対しての呪いの言葉であたりを充滿させることを期待していたが、それは裏切られた。彼は「お前がこの罰に全面的に値すると信じている」ので、すぐさま戻らなければ、俺がお前の首と背中に残っている皮をはぎとってやる、と容赦なく言ったのだ。こうして哀れな少女は救済されることなく戻ること強いられ、おそらくは監督についてあつかましくも主人に訴えたことで、さらなる鞭打ちを受けることになった。

主人はこのような苦情にわずらわされることに怒りを感じているようであった。当時、わたしは我がいとこに対する彼の扱いの哲学を理解していなかった。それは容赦なく非道で苛烈であった。この男には同情の念はないのだろうか？彼は人間的感情をなにもたないのであろうか？いや、わたしは今ではわかると考える。この扱いはこの人物の一部というよりも、制度の一部なのだ。奴隷所有者が監督に対するこのような苦情に耳を傾けていた

(4)

ら、多数の奴隷を所有するという贅沢は不可能になってしまいうだろう。それは監督の職務を完全になきものにしてしまうだろう。つまり言い換えれば、主人自身を監督に変えることになるだろう。時間と労働の大きな損失を引き起こし、監督は足かせをはめられて、彼の命令に従わせるために必要な力を失うことになるだろう。したがって、上訴という危険な特権は厳格に禁じられており、それを使用する者は恐ろしい危険を冒している。にもかかわらず、奴隷がそれを使用するだけの度胸があり、監督について十分に根柢のある苦情を携えて大胆にも主人に近づくとときには、彼は追い払われ、彼が苦情を述べている当の扱いをこのときにも一度受けさえするかもしれない、またこの無謀な行為のために監督だけでなく主人からも鞭打たれるかもしれないが、最終的には、概して監督の扱いの厳格さが緩まり、苦情を訴えるという方策の正しさが証明される。監督はそのようなそのような奴隷に対して鞭を振るうことに慎重になり、鞭を振るいたくなくなるのである。憤慨した奴隷が主人に苦情を持ちこむことを考えるのは、直近の利を期待してではなく、こうした最終的な結果を視野に入れたことである。しごく当然ながら、監督は主人の耳が苦情によってわずらわされるのを好まない。なので、わたしがこれまで述べてきたような類いのことが起きたあとには、監督は概して、こうしたことを考慮してか、もしくは雇い主から内々で彼に与えられた助言や警告のためか、その支配の厳しさを緩和するのである。

奴隷所有者が自分の奴隷に対していかなる行動をとっても構わないと思っているとしても、そして彼が見せしめのために、あるいは自己の気分を満足させるために、どんな無慈悲な行為でもし

てもよいと考えているとしても、怒りに突き動かされることなしに、無防備な女性奴隷の流血した生傷を快く眺めることはできない。奴隷所有者が女性奴隷を救済策もなしに、あるいは救済の見込みもなしにその面前から追い払う時、彼は概して冷酷な性格や生まれつきの残酷さからというよりも、方策に動機づけられて行動している。とはいえ、彼自身の機嫌がかき乱され、彼自身の激情が解き放たれることがあれば、奴隷所有者は残酷さにおいて監督をはるかにしのぐ。彼の憤怒は下っ端の監督のそれよりもずっと恐ろしく際限なく、はるかに大きな畏怖を抱くべきものであることを奴隷に確信させるのである。監督によって機械的に感情もなく行われていたかもしれないことが、今度は意志をもって行われる。今回鞭を振るう人物には責任がない。彼はその気になれば、障害を負わせることも殺すこともでき、利益や損失に関すること以外には、どうなるうと気にする必要がない。激しい気性の持ち主——我が主人のような——にとつては、利益や損失はごく瑣末で不十分な抑制でしかなかった。わたしは彼が、今しがた述べたような激情の爆発に駆られるのを見たことがある——それは自尊心、憎悪、ねたみ、嫉妬、そして復讐への渴望といった苦々しい成分がすべて投げ込まれた激情であった。

わたしがこれから物語る出来事はそうした恐ろしい激情の爆発を引き起こしたが、それは奴隷の生活において特別でも例外的でもなく、わたしが生きてきた奴隷所有社会のどれにおいてもありふれたことである。そうした出来事は主人と奴隷の関係につきものであり、奴隷を所有する国のあらゆる領域で存在している。

読者は、我が主人のもとで生活していた奴隷の名前が列挙され



(5)

た際に、エスター、という名前が言及されたことにお気づきだろう<sup>5</sup>。この人は奴隷少女にとってどこまでも呪いとなるもの、すなわち姿かたちの美しさをもった若い女性であった。彼女は背が高く、整った体つきで、容姿が素晴らしかった。ロイド大佐の娘たちは、姿かたちの魅力では彼女にとうてい勝ることができなかった。エスターはネッド・ロバーツから求愛されており、彼も彼女と同じくらい容姿に優れていた。彼はロイド大佐のお気に入り、奴隷の息子であった。奴隷所有者のなかには、そのような二人の結婚を進んで奨励しようという者もいただろうが、我が主人はなんらかの理由で、エスターとエドワードのあいだで育まれていた愛情を切り裂こうとしていた。彼は、もしお前がエドワードと一緒にいるのをもう一度見かけたら、お前をこっぴどく罰してやると彼女に申し伝えて、このロバーツと付き合うのをやめるように厳重に命じた。当然ながら、この不合理で無情な命令は守られなかった。女性の愛は、鼻で息をしているだけの者が有無を言わせない命令を発しても、消し去ることはできない<sup>7</sup>。エドワードとエスターをはなればなれのままにしておくことは不可能であった。お互いに会いたいと思っており、実際に会うことになった。もし主人が名誉と純潔を旨とする人物であったなら、この事例における彼の動機をもっと好意的にみることもできたかもしれない。

5 ヘスター・ベイリー（一八一〇年〜）。

6 エドワード（ネッド）・ロバーツ（二八一〇年〜）はエドワード・ロイド五世が所有する奴隷のひとり。ここで述べられている出来事は一八二五年に起こったと考えられる。

7 「人間に頼るのをやめよ／鼻で息をしているだけの者に。／どこに彼の値打ちがあるのか。」（イザヤ書に引く）

ない。実際は、彼のやり口が愚かで下劣であるのと同じように、彼の動機は忌まわしいものであった。彼がこの少女の幸福を気にかけていないことはあまりに明らかであった。奴隷制の犠牲者は、神聖な生活に向かうための現世的な動機をすべて奪い去られるというのが、奴隷制の破滅的な特徴のひとつである。多くの女性奴隷がその奇妙な運命の罫と危険のなかにありながら、神への畏れと天国への希望に十分な支えを見出しているが、神と天国のこちら側では、女性奴隷はその所有者の権力と気まぐれと激情のなすがままである。奴隷制は、黒人種が高潔さを保ちながら存続していくための手段を与えてくれない。結婚——その当事者たちに義務を課すものとしての——は、当事者たちをとりまく標準的な道徳感よりも純潔で高貴な心のなかを除けば、ここでは存在しない。まわりがすべて腐敗しているなかで、自らの高潔さを維持していた人物の多くの高潔な実例を知っているということが、わたしの人生の慰めのひとつである。

エスターがエドワードにかなり愛情を抱いており、主人の横暴であさましいふるまいを嫌悪している——嫌悪する理由は彼女にはあった——ことは明らかであった。エドワードは若くて容姿に恵まれており、彼女を愛し彼女の愛を欲していた。彼は今しがた述べたような高尚な意味で彼女の夫となっていたかもしれない。だが、この主人とはだれで何者であったのか？彼の関心は明らかに残忍で身勝手であり、エスターがエドワードを愛するのが自然であるのと同様に、彼女が主人を嫌うのは自然であった。主人は嫌悪され出し抜かれていたが、復讐するだけの力はあるので、苦もなく復讐に及んだ。エスターへの彼の怒りと情け容赦なさのそ

のような発現をたまたま見る機会があった。選ばれた時間が奇妙であった。それは早朝の、他のすべてが静まりかえっていて、お屋敷だろうと炊事場だろうと家族のだけひとりとしてベッドからでてくる前であった。わたしが起きる前にこの残酷な仕事は始まっていたので、そのぞつとさせる準備作業について、わたしが見ることできたのはごく一部にすぎない。わたしはおそらく、哀れなエスターの悲鳴と痛ましい叫び声で目が覚めたのだろう。わたしの寢床は炊事場に向かって開いている小さくて粗末な押入れで、そのざらざらとした板の隙間から、わたしは主人に見られることなく、起きていることをはっきりと見聞きすることができた。エスターの手首は堅く結ばれていて、撚り縄が炬床の近く、頭上の重たい木材の小梁についた頑丈な股釘に固定されていた。その時、彼女は両手をきつく胸に寄せて、長腰掛けの上に立っていた。彼女の背中と肩は腰まで露わだった。主人は牛革の鞭を手にして彼女の後ろに立ち、ありとあらゆる種類の無慈悲で、粗野で、意味ありげな罵詈雑言を口にしながら、その野蛮な仕事の準備をしていた。彼の被害者の叫び声は耳をつんざくばかりであった。彼は残酷なまでに入念で、あたかもこの光景に喜悅しているかのように拷問を長引かせていた。彼は何度も何度もその忌むべき鞭を手にとつては、最も痛みを与える一振りを加えるべく握りを調整していた。哀れなエスターはそれまで一度もきつい鞭打ちを受けたことがなく、その肩はふつくらとして柔らかかった。激しく振り下ろされた一打ちごとに叫び声と血がもれた。「ご勘弁を、どうかご勘弁を、もうやりませんから」と彼女は叫んだが、耳をつんざく彼女の叫びは主人の怒りをますます燃え上がらせる

ばかりにみえた。主人の返答はあまりに下劣で不敬なのでここで再現するのに忍びない。この光景は、それに付随するすべてのことを含めて、極限まで胸糞が悪く衝撃的であり、この残忍な折檻の動機を考慮すると、そのおぞましい犯罪性を言葉では正しく伝えることができない。主人は三十か四十回ほど鞭を振るつた後、その苦しむ犠牲者の縄をほどき、彼女を倒れるままにした。縄をほどかれると、彼女はほとんど立ち上がることもできなかった。わたしは心から彼女を憐れみ——子供ながらに——怒りがわたしのなかに穏やかとはとても言いがたい感情をかき立てたが、わたしは声も上げず、恐怖に打たれ呆然として、何もできなかった。エスターの悲運は次はわたしの番かもしれない。ここに述べた光景は哀れなエスターの場合にはしばしば繰り返され、わたしが知るかぎり、彼女の生涯は不運であった。

## 第六章 ロイド農園での奴隷の扱い

奴隷制についての作者の最初の考察——いつか自由になる予感——監督と女性奴隷の戦い——抵抗がもたらす利点——本居農園での支給日——奴隷たちの歌——その説明——奴隷たちの衣食——裸の子供たち——宿舎での生活——睡眠不足——田畑へと持ち出される子供の世話——牛革の鞭の説明——灰焼きパン——その作り方——夕食の時間——対照的な生活前の章で述べた心を引き裂く出来事は、年若いわたしが奴隷制の性質と歴史について探究するきっかけとなった。なぜわたしは奴隷なのか？なぜある人が奴隷で、他の人は主人なのか？そうでな

(7)

か、つた時代はあつたのか？どうしてこの関係が始まつたのか？こうしたことが、当時のわたしの考えを支配し始めた問いであつたが、わたしはまだほんの子供で、自由州の同い年の子供たちよりもを知らなかつたので、こうした問いについてわたしの不十分な知力をいくら働かせても、遂方に暮れてしまった。これらの事柄についてのわたしの問いを、わたしより少しだけ年長で少しだけものを知っている子供たちによつけても、すぐには確かな答えに到達することはできなかつた。こうした質問をするうちに、なんらかの方法で知るようになったのは、「お空にいる神様」がすべての人を作り出したということ、彼が白人を主人とし、黒人を奴隷としたということであつた。わたしはこれに納得せず、この話題についてのわたしの関心が衰えることもなかつた。また、神は善であり、わたしにとって最善のこと、そしてすべての人にとって最善のことを知っているとも言われた。これは最初の説明よりもいつそう納得がいかなかつた。というのも、これはわたしが抱いていた善についてのどんな考えにも真つ向から対立するものであつたからである。主人がエスターの肉を切り裂いて、あれほど泣き叫ばせるのを許しているのは善ではなかつた。しかも、神が黒人を奴隷にしたということを人々はどうやって知つたのであるのか？お空まで昇つて知つたのだろうか？あるいは、神が降りてきて、そう言ったのだろうか？ここではすべてが闇であつた。神の善性についてのわたしの頑なな考えにいくぶんか安堵をもたらししたのは、神は白人を奴隷所有者としたが、悪い、奴隷所有者としたわけではないこと、しかるべき時がくれば、神は悪い奴隷所有者たちを罰するだろうということ、彼らが死ぬ時には、神

は彼らが「焼き尽くされる」悪い場所へ彼らを送り込むだろうということであつた。にもかかわらず、わたしは奴隷制という関係を、善性についての自分の幼い考えと折り合いをつけることができなかつた。

それからまた、こうした奴隷制についての両者の理論の不可思議な例外がその中間にあることにも気付いた。わたしは奴隷でない、黒人を知っており、奴隷所有者でない白人も知っていた。さらに、ほぼ白人なのに奴隷の人たちも知っていた。したがって、肌の色は奴隷制の基盤としてはきわめて不十分である。

しかし、いったんこの探究に取り掛かると、この問題の真の答えを見つけ出すのにそう時間はかからなかつた。奴隷制の存在を真に説明するのは、肌の色ではなく、犯罪であり、神ではなく、人間であつた。さらに、もうひとつの重要な真理を見つけ出すのにもさして時間はかからなかつた。すなわち、人間が作り出せるものは、人間が解体することができるということである。恐ろしい暗闇は消え失せ、わたしはこの問題の達人マエストロとなつた。ここにはギニアから直接送られてきた奴隷たちがおり、父親や母親がアフリカからさらわれてきた——故郷から強制的に連れ去られ、奴隷になることを強いられた——と言うことのできる者も数多くいた。これはわたしにとって知識ではあるが、わたしを奴隷制への燃え盛る嫌悪で満たし、わたしの苦しみを増して、隷属から脱する手段を教えてくれない種類の知識であつた。だが、これは十分に知るに値する知識であつた。わたしがこの問題を自分の研究対

8 「ギニア」は西アフリカの海岸地域を指す古い言葉であるが、最も広い意味では、現在のアンゴラからセネガルまでの全域を指していた。

象としたのは、せいぜい七歳か八歳のころである。この問題は森にいても、農作業をしていても、川沿いにおいても、少年らしくどこをほつつき歩いていても、わたしとともにあった。そして当時わたしは自由州の存在を知らなかったにもかかわらず、その当方でさえ、いつか自由になるといふ考えがしっかりと焼き付いて脳裏から離れなかったことをはつきりと覚えている。この心強い確信はわたしの人間としての本性に生まれつき備わった夢——奴隸制に対する絶えざる脅威——であり、奴隸制がそのどんな力をもつても黙らせることも消し去ることもできない夢であった。

エスターおばさん——彼女はわたしのおばであった——への残忍な鞭打ちと、タツカホー出身の我がいとこが無慈悲なプラマー氏によってひどく鞭打たれ、恐ろしい苦境に陥っているのを見るまでは、わたしの関心は奴隸制のおぞましい特徴に特に向けられることはなかった。もちろん、鞭打ちのことや監督と奴隸の激しい対立のことを耳に挟んだことがあったが、そうした出来事が起さる時間と場所に居合わせたことは一度もなかった。ほとんどの時間は遊びや気晴らしに費やされ、そのため、たくさんの人手が働き、残忍な光景が行われ目撃されるトゥモロコシ畑やタバコ畑に足が向かうことはなかった。しかし、エスターおばさんの鞭打ち以降、主人の家のみならず、ロイド大佐の農園においても、同様に衝撃的な事例を数多く目にした。わたしが目撃してひどく動揺した最初の事例のひとつが、ロイド大佐が所有していたネリーという名前の女性の鞭打ちであった。ネリーが犯したとされる

9 ネリー(一七八七年?)は、ロイド大佐の船「サリー・ロイド号」の甲板員であったハリ・ケレムの妻。

罪は、奴隸が通常着せられる一連の罪のなかでも最もありふれていて最も瑣末な罪、すなわち「無礼」であった。これは、その時の主人や監督の気まぐれ次第で、ほとんどなんでも意味すること、なにも意味しないこともある。しかし、それがなんであれ、あるいはなんでなかれ、「無礼」という名前をつけられたときには、それを着せられた当事者は鞭打ちを逃れることができない。この罪は、奴隸の返事の口調、そもそも返事をしたこと、返事をしなかったこと、表情、頭の動き、足取り、物腰、挙動といったさまざまな点で犯しうる。いま考慮しているこの場合、奴隸所有者のあらゆる基準に照らし合わせて、無礼の真の事例であると容易に信じることができる。ネリーには、この罪を犯すためのすべての必要な条件がそろっていた。彼女は聡明な混血であり、ロイド大佐のスループ船でお気に入りの「船員」の広く認知された妻であり、五人の元気な子供の母親であった。彼女ははつらつとした元気いっぱいの女性で、農園のなかで無礼の罪を最も犯しそうな人たちのうちのひとりであった。わたしの注意は、聞こえてくる騒音と罵りの言葉と叫び声によって、その光景に引き寄せられた。その方向に少し進むと、小競り合いをしている当事者たちがいた。わたしが目撃したとき、監督のセヴィア氏がネリーをつかんで一本の木まで引つ張っていかうとしており、それに対してネリーがかたくなに抵抗しているところであった。しかし抵抗は、監督の計画の進行を遅らせる以外に甲斐のないものであった。ネリーは——すでに述べたように——五人の子供の母であり、そのうち三人が現場に居合わせていて、まだとても小さかったにもかかわらず(七歳から十歳だったと思う)、三人は勇敢に



も母親を守ろうとして、監督に見事に石を浴びせかけた。この小さな子供たちのひとりが駆けて行つて、監督の足を取つて彼に噛みついたが、この怪物はネリーの相手をするのであまりに忙しなく、子供たちの攻撃には注意を向けることができなかつた。わたくしがセヴィア氏を最初に目にしたとき、彼の顔には数多くの血痕がついていて、争いが続くにつれて血痕は増えていった。ネリーの指の痕が見てとれ、それが見えたことでわたしは喜んだ。子供たちの興奮した叫び声——「お母さんをはなせ」——「お母さんをはなせ」——の合間に、丸頭の監督の歯のあいだから、「白人に無礼をしたらどうなるか、このく……あ……に教えてやる」という、脅しが織り交ぜられた苦々しい悪態がいくつ漏れ出た。ネリーが自身をいくつかの点でまわりの奴隷たちより上だと感じていたことは疑いない。彼女は妻で母であり、夫は重宝され気に入られていた奴隷であつた。しかも彼はスルーブ船に搭乗している上級船員のひとりであり、スルーブ船の船員は——方々で農園を代表しなくてはならないので——一般に大切に扱われていた。監督がハリーを鞭打つことは許されていなかった。ならばどうしてハリーの妻を鞭打つことが許されようか？このような考えが彼女に影響を与えていたことは疑いないが、どんな理由にせよ、彼女は気高く抵抗し、ほとんどの奴隷たちとは違って、自分を鞭打つたらセヴィア氏に可能なかぎり大きな代償を払わせてやる決意のようであつた。彼の（そして彼女の）顔についた血は、彼女の勇氣と爪使いの冴えだけでなく、彼女の力量を証拠立てていた。わたしは、セヴィア氏が彼女の抵抗に我を失つて、彼女に強烈な一撃を見舞わせて殴り倒してしまうのではと思つていたが、

それは違つていた。彼は獐猛なブルドッグのように——氣質においても見た目においても彼はブルドッグに似ていた——つかんだ手を緩めずに、ネリーからの殴打も母親の解放を求める子供たちの悲鳴も一顧だにせず、着実にその犠牲者を木の方へと引きずつていった。もし仕事を失うおそれがなければ、彼は間違ひなくヒッコリーの杖で彼女を殴り倒していただろう。男の奴隷であれば縛り上げるために殴り倒すことは賢明だとはしばしばみなされるが、監督が女性をそのように扱うのは卑怯で弁明の余地ないことだと考えられている。彼に期待されているのは、女を縛り上げ、力や技能をあまり費やすことなしに、南部の言葉で「お上品な鞭打ち」と呼ばれるものを女に施すことである。わたしはわくわくとした関心をもつて、この予備的な攻防の成り行きを見つめていたが、悪党が彼女に対して新たな優勢を得ることに落胆した。彼女がこの野獣を打ち負かす形勢にみえる時もあったが、最後は彼女の力がまさり、彼女の腕に繩を巻いて、もたら狙つていた木に彼女を堅く縛りつけた。こうなつてしまうと、ネリーは彼の情け容赦ない鞭先のなすがままであり、このあとに起こつたことを語るのには気が進まない。この卑劣漢はその脅しをすべて実行し、怒りに荒れ狂う復讐心をもつすべての苛烈さを動員して鞭を振るつた。この恐ろしい罰を受けているあいだ、女の叫び声は子供たちの叫び声と混ざり合つた。それは、読者が今後聞く必要のないまま済むことを願わないではいられないような音であつた。ネリーが繩からほどかれたとき、彼女の背中は血で覆われていた。赤い鞭の痕が両肩じゅうに残つていた。彼女は鞭打たれた——ひどく鞭打たれたが、彼女は服従させられてはいなかつた。というの

も、彼女は監督を公然と非難し、ありとあらゆるやり方で口汚く罵ることをやめなかったからである。彼は彼女の肉体に青あざをつくつたが、彼女の不屈の精神をくじけさせることはできなかった。このような鞭打ちが同じ監督によって繰り返されることはめつたにない。監督は最も容易に鞭打つことができる人物を鞭打つことを好む。従属は非道と悪行に対する最善の解決策であるというかつての原則は奴隷農園にはあてはまらない。最も容易に鞭打たれる者が最も頻繁に鞭打たれるのであり、自身の身を守るために監督に対して立ち上る勇氣のある奴隷こそが、最初は多くのひどい鞭打ちを受けるかもしれないにせよ、最後には、奴隷という形式的な関係のままだとにしても、自由になるのである。ある奴隷は、「おれを撃つことはできるが、おれを鞭打つことはできないぞ」とリグビー・ホプキンスに言い、結果として鞭打たれることも撃ち殺されることもなかった<sup>10</sup>。仮に撃ち殺されることも彼の末路だったとしても、それは、意気地なしの下衆な精神に課せられる、生きながらの緩慢な死に比べればまだ好ましかったであろう。わたしは、セヴィア氏がネリーを再び鞭打とうとしたとは聞いていない。彼女を服従させようとした試みからまもなくして、彼は病気にかかり死んでしまったので、おそらく彼が彼女を鞭打ちすることは二度となかった。この卑劣な人物は生きていた時と同じように、悔悛することないまま死んだ。伝えられるところでは——それがどれだけ本当なのかはわからないが——その生

10 リグビー・ホプキンスはトールボット郡で長年農業を営んでいたメソジスト派の牧師。国勢調査によれば、一八三〇年の時点で五十歳から六十歳で、一八二〇年には十七名の奴隷を所有していたが、十年後にはひとりも所有していなかった。

涯の最後の時間になって、彼を支配していた情熱がその力を發揮し、彼は死と格闘しながら、あたかも無力な奴隷の肉を切り裂いているかのように、恐ろしい悪態を吐き、牛革の鞭を振り回していたと言われる。ひとつ確かなことは、セヴィア氏が健康であったときには、彼が話すのを聞くだけでも、普通の人の血を凍りつかせ、毛を逆だたせるのに十分だったということである。本性、すなわち彼の残忍な気質は、彼の顔に、奴隷使役人にしても異様なほどの野蛮な表情を与えていた。タバコと怒りが彼の歯を短くすり減らして、堅く噛み合わされてすれ合う歯のあいだから漏れ出てくる文はほぼすべて、なんらかの冒瀆的な言葉の奔出で始められるか、終わっていた。彼がそこにいることで田畑までもが血塗られた冒瀆的な場に変わった。彼はその残忍さゆえに憎まれ、その卑劣さゆえに軽蔑されていたので、その家の外では——家で悼まれていればの話だが——誰ひとりとして彼の死を悼む者はおらず、奴隷たちからは彼の死は神の手の慈悲深い介入だと見なされていた。これ以上に重い呪いを背負って墓へと赴いた人物はいなかった。セヴィア氏の職はすぐさまホプキンス氏なる人物<sup>11</sup>によって取って代わられたが、この人は非常に異なる人物だったので、おおいに助かった。彼はあらゆる面でその前任者よりもであり、監督としてはこの上なく善良であった。彼のやり方は常軌を逸した残忍さはまったく見当たらず、奴隷を待たま鞭打つこともあったが、その時には鞭打ちに特別な喜びを見出しているようではなく、それどころか、下劣な仕事だと感じているかの

11 前出のリグビー・ホプキンスのこと。

ような素振りであつた。ホプキンズ氏がいたのはごく短い期間であり、彼の職は——奴隷たち全般にとつて残念なことに——ゴア氏なる人物<sup>12</sup>によつて取つて代わられた。この人物についてはあとでもつと話す。さしあたり、ゴア氏はセヴィア氏とくらべて、騒がしさと不敬さではまだましという点を除いては、よりまともというわけではなかつたと言えば十分である。

ロイド大佐の農園の実務然とした様子についてはすでに言及した。この実務然としたさまは、各月の最後の二日間、さまざまな農場から奴隷たちが毎月の食事と肉の支給を受け取りにやってくる日になると非常に顕著になつた。この二日間は奴隷たちにとつてお祭り騒ぎの日であり、だれが支給を受け取るために大屋敷の農場に行き、実際にそこでの、つまり（彼らにとつては）この首都での仕事を担当する役目を選ばれるかについて、奴隷たちはおおいに競い合うのだった。この場所の美麗さと荘厳さ、そこにいる奴隷の数多さ、そしてハリ、ピーター、ジェイク——スルーブ船の船員たち——がボルチモアで買った小間物売り物としてほぼいつでも忍ばせているという事実によつて、大屋敷の農場に行くことはひとつの特権となつていた。この役目を選ばれることは大きな名誉だともみなされていた。それは信頼と好意の証明だと受け取られていたが、この場所に行くことを争っている者たちの最大の動機はおそらく、野良仕事の退屈きわまる単調さから逃れたい、そして監督の目と鞭が及ばないところに行きたいという欲望であつただろう。雄牛の一団とともに、見張り役の監督に付

12 オースティン・ゴア（一七九四—一八七一年）

き添われることなく、荷車の荷台に座つて出発してしまえば、奴隷は比較的自由であり、思索に富んだ奴隷であれば考える時間もあつた。奴隷たちは一般に、働くだけでなく歌うことも期待されている。寡黙な奴隷は主人からも監督からも好かれぬ。奴隷たちが静かなときには、「声をだせ」、「声をだせ」、「手を貸せ」が彼らにたいいてい投げかけられる言葉であつた。このことは、南部諸州でほとんど絶え間なく歌声が聞かれることを説明するかもしれない。御者たちのあいだでは一般に、監督に自分がどこにいるか、そして自分が仕事をしていることを知らせるひとつの手段として、多かれ少なかれ歌が歌われていた。しかし支給日には、大屋敷の農場を訪問する者たちは格別に興奮して騒がしかつた。途上、彼らはその狂おしい歌によつて、太古からの深い森を何マイルにもわたつて響き渡らせるのだった。それらの歌は狂おしいとはいつても、かならずしも陽気なものではなかつた。それどころか、歌は大部分において物憂げであり、苦悩と悲嘆の話を物語つていた。歓喜の感情が最も喧しく奔出するなかに、常に深い悲哀の音色が秘められていた。わたしは奴隷制を逃れて以来、アイルランドにいた時を除けば、どこにおいても、このような歌を聞いたことがない。アイルランドでは同じ嘆きの歌を耳にし、非常に感銘をうけた。それは一八四五—六年度の飢饉のさなかであつた<sup>13</sup>。

13 ダグラスは一八四五年八月から翌年一月まで、奴隷制廃止運動の演説家としてアイルランドの各都市をまわつた。これはちょうどアイルランドでジャガイモ不作による大飢饉が起つた時期に一致する。飢饉の結果として、四六年から五年までの間に二万人が飢饉で、三十三万九千人が病気で死亡したのに加えて、大量のアイルランド移民がアメリカに流入することにもなつた。

奴隷たちの歌のどれにも、大屋敷の農場を誉めたたえるなんらかの表現が盛り込まれていた。それは所有者の自尊心をくすぐり、彼からの好意的な眼差しを引き出すようにするものであった。

「大屋敷の農場へいくぞ、

おう、そうさ！おう、そうさ！おう、そうさ！

ご主人さまはいい主人、

おう、そうさ！おう、そうさ！おう、そうさ！」

奴隷たちはこの歌を、自身の即興で作ったほかの言葉も加えて歌う——それは、ほかの人たちには意味不明だが、自分たちにとっては意味深長な言葉であった。わたしは、奴隷制の単に具体的な残忍さを記したあらゆる書籍を読むよりも、こうした歌をただ聴くほうが、真に高い精神性の持ち主である男女たちには、奴隷制の精神を圧碎し致死的な性質を印象づける上で効果的ではないかと時として思うことがあった。わたしは今でも、これらの歌に対してわたしが感じたことを、十年前に我が生涯を素描した際に、農園で自分が経験したこのことについて次のように語った時ほどにうまく表現できない。

「わたしが奴隷だった頃は、こうした素材で、みたとこ支離滅裂な歌に込められた深い意味を理解していなかった。わたしは仲間内にいたので、外にいる人たちが見聞きするようにには見聞きしてはいなかった。それらの歌はその当時のわたしの不十分な理解力を完全に超えるような話を語っていた。それらは声高で長く深

い旋律であり、この上なく苦々しい苦悶に煮えたぎる魂の祈りと訴えを表現していた。すべての旋律は奴隷制に対する証言であり、支配からの解放を求める神への祈りであった。わたしは、これらの狂おしい歌を聴くたびに憂鬱な気分になり、表現できない悲しさで心がいっぱいになるのだった。今でも、この曲が繰り返されるだけで気持ちひしがれてしまい、涙を流しながらこの文章を書いている。人間性を喪失させてしまう奴隷制の性質について、わたしが初めておぼろげな考えを抱くようになった端緒がこれらの歌にはある。わたしはこの考えをどうしても捨て去ることができない。これらの歌は今でもわたしにつきまとい、奴隷制への憎悪を深め、隷属状態にある同胞たちへの同情の念をかきたてるのである。もし精神を抹殺する奴隷制の力がどのようなかを心に刻みつけたという人がいたら、その人をロイド大佐の農園に行かせて、支給日に深い松林に身を潜ませて、そこで静かにじつくりと、彼の魂の空間を通り過ぎる音を分析させてみよう。それでもし彼が感銘を受けないようであれば、それは単に「彼の非情な心には血肉が通っていない」<sup>14</sup>からということであろう。<sup>15</sup>

奴隷は世界で最も満足し幸福な労働者であるという発言がなさ

14 英国の詩人ウィリアム・クーパー（一七三一—一八〇〇年）の『務め』（一七八五年）に収められた詩「計時器」の八行目から。クーパーは奴隷制度反対の詩を数多く書いており、十九世紀のアメリカの奴隷制廃止運動においてもよく参照された。

15 ダグラスの一八四五年の第一自伝の第二章からの引用。ただし一部の語句や句読点に細かい異同が見られる。



れるのは珍しくない。奴隷たちは踊り歌い、あらゆる種類の楽しいな音声を発する——その通りであるが、彼らが歌っているから幸福だと思うのは大きな間違いである。奴隷の歌はその心の喜びよりも悲しみをあらわしているのであり、苦悩する心が涙によって救われるのと同じように、彼は歌によって救われるのである。

人間精神はその性質として、極度に追い詰められると、しばしば真逆の手法に訴えかけるようになってきている。両極端は物質においても精神においても一致する。「パール号」に乗船した奴隷たちが追いつかれ、拘束され、牢獄に送られた時——彼らの自由への希望が打ち砕かれた時——、彼らは鎖につながれて行進しながら歌い、(エミリー・エドモンドソンが述べるように)歌うことに憂鬱な救いを見出していた<sup>16</sup>。奴隷の歌を満足と幸福の証しだとするのなら、無人島に漂着した男の歌も満足と幸福の証しだと考えて同じく差し支えないということになろう。悲嘆と荒廃は喜びと平穏と同様にそれ自身の歌をもつ。奴隷たちは自分の幸福を表現するためというよりも、自分を幸福にするために歌うのである。奴隷所有者たちは、彼らが所有する奴隷は世界のどの国の小作人よりも生活上の物質的な快適さを享受していると誇っている。わたしの経験によれば、これは正しくない。ロイド大佐の農場の

16 一八四八年四月、七十七名の奴隷が首都ワシントン出港のスクーターナー船「パール号」で逃亡しようとした事件。強風のためにチェサピーク湾の入り口で停泊していたパール号は拿捕され、ワシントンへ戻された。事件後、七十七名の奴隷のほとんどは深南部へと売り払われることになった。エミリー・エドモンドソンもそのような奴隷の一人であったが、幸運にも、家族や高名な奴隷制廃止論者ヘンリー・ウォード・ビーチャーなどの助力により自由の身となった。

奴隷の男女は、毎月支給される食料として、酢漬けの豚肉八ポンド、もしくは魚でそれに相当する分量を受け取っていた。豚肉はしばしば腐っており、魚は品質としては最低のもの——北部の市場で売りに出してもほとんど儲けのないニシン——であった。

奴隷たちは豚肉か魚に加えて、一ブッシェルのひき割りトウモロコシをもらったが、ふるいにかけておらず、十五パーセントの部分が豚の餌にしか適していなかった。これに加えて、一バイントの塩が支給された。これが日曜を除く毎日、朝から晩まで、常時野外の田畑で働く成人奴隷の毎月の支給のすべてであった。一日あたり四分の一ポンドよりもわずかに多い分量の肉と、一週間あたり一ベック<sup>17</sup>にも満たないひき割りトウモロコシで生きていくということになる。人間がやりうる仕事のなかで、奴隷の畑仕事ほどに、肉体的な疲弊を防ぐために十分な食料を必要とするような仕事はない。奴隷への食料支給については以上である。次に衣服について述べよう。この農園で年ごとに奴隷に支給される衣類は、麻くず地——最も粗い生地タオルの素材である亜麻布——のシャツ二枚、夏用に同じ素材のズボン一着、冬用にひどくぞんざいに作られた毛織地のズボン一着と上着一着、織糸の靴下一足とひどく粗雑な作りの靴一足からなっていた。一人の奴隷の衣類は全部ひつくるめて一年あたり八ドルを超えることはなかったはずである。小さな子供たちへの食料と衣服の支給はその母親が、彼らの世話を担当する年長の女性奴隷に委ねられていた。田畑で働くことのできない子供には靴も靴下も上着もズボン

17 一ベックは四分の一ブッシェルで、およそ九リットル弱。

も支給されなかった。そうした子供の服は一年あたり麻くず地のシャツ二枚——すでに説明したものの——であり、よくあることだったが、それが着られなくなってしまつと、次の支給日まで裸で過ごすのであつた。ロイド大佐の農園では、五歳から十歳までの小さな子供たちの群れが、アフリカ西海岸の小さな異教徒と同様に、衣服も身につけずにいるのを見ることができるかもしれない。しかもこれが夏の間だけでなく、三月の霜の降る気候の時期にも見られるのである。女兒だろうと男児とさして変わらず、子供はみなほとんど裸の状態であつた。

その上で寝るための寝台となると、野良働きはだれも使つておらず、支給されるのは粗悪な毛布——北部で馬にかぶせるのに使われている毛布とさしてかわらない程度の——だけで、これも成人の男女だけに支給された。子供たちは宿舎内外の穴や隅っこに身をうずめた——しばしば巨大な煙突の隅で、足を温めておくために灰に突っ込んでいた。しかし寝床がないことはあまり深刻な欠乏とは考えられていなかった。睡眠時間のほうがずっと大事であつた。というのも、一日の仕事が終わると、ほとんどの奴隷は自分の洗濯や修繕や料理をしなくてはならず、そうしたことをするための通常の設備はほとんどあるいはまったくないため、奴隷の睡眠時間はかなり多くは次の日の仕事のために必要とされる準備に費やされるからである。

寝るための家屋——仮にそう呼んでも差し支えないとして——は快適さや体裁にほとんど考慮が払われていなかった。若いも若きも、男も女も、既婚者も独身者も、各自自分の毛布——寒さや露出から守ってくれる唯一のもの——にくるまって、同じ土床に

寝ころがっていた。だが、夜はその始まりと終わりの両端で短縮されていた。奴隷たちはものが見えるかぎり働くこともしばしばで、翌日の料理と修繕のために遅くまで起きていた。そして朝のおとずれを告げる最初の灰色の一筋とともに、使役人のラッパによつて田畑へと駆りだされるのである。

奴隷たちはどんな過ちよりも寝過ぐすことで鞭打たれることが多い。それは年齢や性別にかかわらずである。監督は棍棒と牛革の鞭で武装して宿舎の扉のところに立ち、数分でも遅れた者であればだれでも鞭打つつもりでいる。ラッパが鳴ると、皆いっせいに扉のほうへと飛び出していき、最後の者は監督から一発くらうのが必至である。野良働きの若い母親たちは、朝の十時ごろに一時間、自分の子供の世話をするために宿舎に戻ることが許されていた。時に彼女たちは、子供の世話をすることで時間を無駄にしないように、自分の子供を連れてきて柵の隅においておくことが強いられた。監督はたいい馬に乗つて農場をまわる。彼はいつでも牛革の鞭一本とヒッコリー材の棍棒一本をお供としている。牛革は北部諸州ではめつたに見かけない種類の鞭である。それはなめし加工はしないで乾燥した雄牛の皮ですべてできていて、十分に年数を経たカシの木材と同じくらい固い。それはさまざまに大きさを作られるが、通常の長さは三フィートほどである。手に握る部分は厚さが一インチ近くあり、この柄あるいは握りの端から鞭先にかけて、牛革がしだいに細くなっている。これによつて鞭は非常に柔軟で弾力に富むものとなる。どんなに硬い背中でも、これの一振りを受けるだけで、肉が切り裂かれ流血してしまふ。牛革は赤と青と緑に塗られていて、奴隷に対して好んで使わ

れる鞭である。この鞭は「九尾の猫鞭」よりもたちが悪いと思う。これは腕の力すべてを一点に集中させて、空気をヒュンといわせるほどの弾力で振るわれるのだ。これは恐るべき道具で、非常に手ごころなので、監督はいつでもこれを身につけて、すぐさま使う体勢でいられる。これを使ってみたいという誘惑は常に強力で、監督はその気になれば、それを使う理由にいつでもことかかない。それは彼にとつて文字どおり一打をともしなう一言であり<sup>18</sup>、しかもほとんどの場合、一打のほうが先にくる。

一般的な習わしとして、奴隸たちは朝食や昼食のために宿舎に戻ってくることはなく、「灰焼きパン」をもつてでかけ、田畑でそれを食べる。本居農園ではそうしていたが、それはおそらく宿舎から田畑への距離が時として二マイル、さらには三マイルもあつたからであろう。

奴隸たちの夕食は、大きな一切れの灰焼きパンと小さな一切れの豚肉、もしくは塩漬けのニシン二匹からなつていた。炬も適当な調理器具もなかつたので、奴隸たちは自分の粗びき粉を、スプーンが立つくらい濃さになるまで、少量の水に混ぜていた。木が炭と灰になるまで燃えたあと、生地をカシの葉っぱのあいだに入れて、完全に覆われるようにそれを灰のなかに注意深く置くのだった。このパンが灰焼きパンと呼ばれるのはこうした理由による。この風変わりなパンの表面は六分の一インチの深さまで灰で覆われ、灰のためにあまり歯ざわりも味もよろしくなくなつてしまつてゐるのは確かである。麦かすは粗びき粉の粗末な部分で

18 シェイクスピア『ロミオとジュリエット』第三幕第一場より。

あるが、パンに混じつた細かくきらきらとした薄片として一緒に焼かれる。この灰と麦かす入りのパンは、北部の人にとつては吐き気を催させ、喉がつまるものであろうが、奴隸たちからは非常に好まれてゐる。奴隸たちはこのパンを貪欲に食べ、気にするのはその質よりも量である。彼らはあまりに乏しい食料しか与えられず、あまりに休みなく働かされてゐるので、食料の質をさほど気にする余裕はないのである。昼食どき、彼らはその粗末な食事を味わつたあとに許されてゐるわずかな時間を思い思いに過ごす。「引き返し」<sup>19</sup>に横になつて眠る者もいれば、互いに集まつて

話をする者や針と糸を手にして自分のぼろぼろになつた衣服を繕う者もいる。時として一団のなかから放埒でしわがれた笑い声、しばしば歌が聞こえてくるかもしれない。だがすぐに監督が田畑を突つ切つてやってくる。「立て、立つて、働け」と叫んでゐる。こうして、十二時（正午）から暗くなるまで、家畜同然の人間は

粗雑な鍬を振るつて働く。報酬の望みも、感謝の念も、子供への愛情も、自らの状態がよくなる見込みもないのに、奴隸使役人の鞭に対する怖れと恐怖以外にはなにもないのに、急かされて働く。このように一日が過ぎ、別の日も過ぎていく。

しかし、田畑での粗暴な慣行についてはもうこれくらいにしよ。田畑は、下劣な粗野さと無慈悲な残忍さが、熱帯の雑草のように好き放題に広まり横行する場である。人間の姿をした卑劣漢が月三十ドルの報酬で、鞭を振り振り、あたりを馬で乗りまわし、威張り散らして歩きまわつて、絶望しきつた男たちやなす

19 「引き返し」とは、鋤で畝間を作る際に、牛馬と鋤を反転させるために作物が植えられていない、畝間の両端の場所のこと。

べのない女たちに深手を負わせる場である——これはあまりにおぞましく、非情で、恥ずべき仕事なので、まともな人であればこの仕事に関わるよりは自分の脳みそを吹き飛ばすことを選ぶであろう。次にわたしが読者にみせんとしているのは、同様に邪悪ではあるが、さほどうんざりさせることのない奴隷生活の側面である。そこでは、自尊心と仰々しさが豪華に悠々と繰り広げられ、千人もの人間の労苦が安楽な怠惰と罪のもとにある一個の家族を支えている。それは大屋敷である。ロイド家の本居である！その壮麗さについてはいくぶんかすでお伝えしている——そしてここにおいて、つい先ほどから見えてきたような深刻な貧困と物質的悲惨さとは対極の豪華の極みを見ることになるだろう。しかしこの二つの極端にはこういう違いがある。すなわち、奴隷の場合には、彼の宿命の悲惨や困難はほかの人たちによって押しつけられているが、主人の場合には、そうした悲惨や困難は自分自身で招いているということである。奴隷はほかの人たちによって支配されている被支配者であり、奴隷所有者も被支配者ではあるが、彼自身が自分の支配の元凶である。奴隷制は奴隷にとってよりも主人にとってより大きな悪であるという言葉には、それを口にする多くの人が思っているよりも真実がある。永遠正義の自動発効する法は、ほかのところと同様にここでも、悪事を行う者のすぐ後ろまで迫り、悪事にまつわるすべての罰から逃れることを不可能にしている。しかし哲学的なことはほかの人たちに任せておこう。ここでのわたしの本分は語り記述することであり、物語られた事実を読者が正しく理解するのを助けるために、時おり一言二言さしはさむだけにとどめよう。